

2024 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	石渡靖之
最終学歴	学 位	専門分野
青山学院大学経営学部	学士	サッカー論、指導者養成論

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

本学における「三つの言葉」の具現化に向けて、日々の教育活動に尽力し、社会のために役立つ人材を育成する。

【目標】

本学における「三つの言葉」（建学の精神／校訓／教職員の心構え）を念頭に置き、学生指導に従事する。そのためには、学生一人一人の成長に向けて、学生の自立と自律をベースに支援を行う。

【方針】

常に前向きに学び続ける意欲のある人材を育成する。

自分自身の考えをしっかりと持ちながらも、他者の考えを尊重し、協働の精神で社会に貢献できる人材を育成する。

【計画（方法）】

担当する学生個々の個性を尊重しつつ、学生の特徴をつかみ、当該学生に必要な支援の内容及び支援の方法等をこれまで培った経験等を用いながら、学生一人一人の成長を支援する。

ただし、変化の激しい予測不能な現代社会を生き抜く上では、確実に必要となる学生自身の自己解決能力の向上を目指しながら支援を行う。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

基礎演習Ⅰ、人間健康学、人間健康特講Ⅲ、簿記会計Ⅰ

（後期）

基礎演習Ⅱ、東邦プロジェクトA、簿記会計Ⅱ

○教育方法の実践

学生との対話を重視するために、授業の際、授業メモを配付し、必要な授業内容をメモしてもらうのと同時に、授業で感じたことや質問、学生自身の考えをできるだけ聞き取るように工夫した。また、teams の chat を有効に活用し、学生からの質問等に随時回答できるようにした。

基礎演習では、学生一人一人と対話しながら、個別指導を重点に講義を行った。そして、学生一人一人の思考力、判断力、表現力を養うとともに、学生が考察、評価を基に自己評価を行うことはもとより、同じゼミ生に対しての他者評価を行う視点を持って、講義を行った。

経営学部の簿記会計の授業では、学生の習熟度に差が大きいことから、知識・理解を確実なものにし、分かる喜びを創出し、学習意欲を高める目的で授業の開始 15～20 分は、前時の復習を行い、前時に感染症等で欠席した学生が理解不足から授業の意欲を喪失することがないようにし、学生の反応を確かめながら毎時の授業を行うようにした。

また、科目の特性上、学生が学習記録をメモをして知識・技能の習得を目指すということを念頭に板書計画を綿密に作成し、毎時の授業で板書する内容を精選するとともに、授業中に黒板を消すことがないように配慮した。学生は、黒板が消されていないことで、授業終了時にカメラで写真を撮っていた。

○作成した教科書・教材

新規に作成した教科書はありませんが、昨年度末に人間健康学部の教員で作成し、自身も一つの章を担当して執筆した教科書「人間健康学」を用いて『人間健康学概論』を担当した。

また、基礎演習を除く講義・科目において、自作のパワーポイント資料を準備し、適宜 **teams** に投稿し、予習・復習に活用できるように工夫した。

○自己評価

講義の人数の関係で学生との対話が十分に行えないことはあったが、教育実践に記述したような方法を採り入れながら、学生一人一人の理解力の向上に注力した。学生の授業評価アンケートにおいても、概ね良好な結果であったことから、自身の評価も概ね良いと考えている。しかしながら、より良い授業を実践するための教材や授業資料の作成を更に心がけていきたいと考えている。

II 研究活動

○研究課題

担当する科目の更なる研究の深化及び競技スポーツ、特にサッカーの試合やトレーニングに科学的な分析手法を取り入れて選手やチームのレベルアップを図るための研究

○目標・計画

【目標】

研究課題を整理し、前期は **Microsoft teams** を効果的に活用しながら、学生の自主的な学習を支援し、主体的な学習・研究習慣を醸成することに努める。また、授業内容をより分かりやすく伝える工夫をする。そして、学生の反応を確かめながら必要な指導助言を丁寧に行う。また、新たに始める地域総合研究所の学生の研究活動を支援しながら、学生の成長及び地域に貢献する本学の方針の一助となるよう努めていきたい。

【計画】

対面での授業による生徒との応答や関わりを重視し、学生の理解を担保する授業の進め方に工夫や変更を加えながらより良い授業展開を目指す。また、地域の学校やクラブチーム及び県・市サッカー協会等との関係づくりを更に進め、後期からの授業準備を進める。

後期は、とくに東邦高校人間健康コースにおける授業の更なる充実を図り、またサッカーに **AI** カメラやウェアラブルデバイス等の科学的分析装置を取り入れて、客観的な数値データを選手に示しながら、チームや選手のレベルアップを図る。

○2017年4月から2025年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・「人間健康学」（2023年2月、唯学書房、共同執筆者）

（学術論文）

（学会発表）

（特許）

(その他)

東邦学誌第 54 号に「愛知東邦大学男子サッカー部のデータ分析と活用」を投稿

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本商業教育学会、日本商業教育学会千葉支部

○自己評価

学会活動は、日本商業教育学会関東支部学会研究会に参加し、コロナ渦でも成長を遂げているビジネスモデルについての研究発表に参加し、顧客のニーズの把握とアイデアの重要性を改めて感じた。また、自身の研究費を使って、データスタジアム株式会社、東京大学ア式蹴球部テクニカルユニット（データ分析活動を行う組織）と連携して、スポーツ（サッカー競技）におけるデータの活用と競技力の向上とデータ分析グループ（学生）の能力開発、資質向上について取り組み多くの知見をえるとともに当該組織との連携活動を今後も行う道筋を得ることができた。

III 大学運営

○目標・計画

【目標】

スポーツ振興局の事業及び大学の強化クラブの一つである男子サッカー部の指導に重点を置き、建学の精神を念頭にサッカーを通じての人間の成長を目途とするクラブとして存在感と信頼感を高められるようにする。成績的には、東海学生サッカーリーグ 1 部残留ではなく、1 部上位進出並びに全国大会出場をチーム一丸で目指す。また、サッカーを通じての高大連携を更に推進する。

【計画】

通年をかけて、人間的成長とチームや個人の規律を重視した指導方針を選手に浸透させる。

そして、選手の自立、クラブの成長を実現するべく尽力する。

2025 年 3 月に開催予定の大学スプリングカップ並びに高校の愛知三河ユースサッカースプリングカップの更なる発展のため、準備を進める。

また、次年度以降の更なる強化に向けた補強活動並びに準備活動を並行して行う。

○学内委員等

2025 年 3 月 19 日から 21 日の日程で本学園が後援し、産官学が連携して東三河地域の地域貢献を目指す『愛知三河ユースサッカースプリングカップ 2025』の実行委員会委員長として大会の運営を行った。

○自己評価

男子サッカー部の 2025 年度新入生はスポーツ音楽推薦だけでなく、AO 入試等を通じて 26 名が予定されている。これは、男子サッカー部の取組みや活動が地域に信頼されてきた成果ではないかと考えている。また、強化部活動を通じて地域貢献の重要性を改めて認識した 1 年であった。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

サッカーを活用して学園のブランディングに繋がるように尽力する。また、後期に実施する東邦プロジェクトのサッカー審判ボランティアを通じた活動の様々な準備を行う。

【計画】

昨年度までの活動を点検しながら、地域のニーズ等を確認し、自分に任される仕事及び自分に期待される分野の仕事をしっかり行う。

特にスポーツの分野におけるネットワークを生かして学園のブランディングに貢献する方策を考えていく。また、スポンサー開拓活動を行い、男子サッカー部の活動を更に充実させる。

○学会活動等

JFA（公財日本サッカー協会）のA級ジェネラルコーチ講習会を全日本大学サッカー連盟の推薦で受講した、前期・中期・後期3週間に及び合宿形式の研修会とオンラインによる医学、心理学、社会学等の講義とレポート提出でライセンスを取得した。この講習会を通じて、Jリーグ、大学、高校、中学生年代など多くの指導者と関係を構築できたことは大きな財産となると考える。

○地域連携・社会貢献等

学園の協力の下、全国の高校生年代及び大学生のサッカー大会を2025年3月に開催した。

また、後期の持ち授業である東邦プロジェクトAの活動で、2024年12月に愛知県小牧市で開催された中学生年代のサッカー大会の審判及び運営に学生が携わった。コロナ渦も含め4回目の運営補助及び審判ボランティアということで、関係者や保護者の間でも愛知東邦大学男子サッカー部の活動が浸透してきたと実感した。

○自己評価

地域や行政関係者ならびにスポーツ団体の関係者の方々からも活動を感謝され、東邦高校ならびに愛知東邦大学の認知度向上に貢献できた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

学園の教職員として、「三つの言葉」の教職員の心構えを念頭に置いて、NEXT100を迎える学園の更なる発展と学生・生徒の成長のため貢献できるよう日々努力していく。

2025年2月24日（月）に男子サッカー部、硬式野球部合同の闇バイト防止研修会を愛知県警察本部並びに男子サッカー部支援企業である株式会社スポーツフィールドのご協力の下、開催した。強化部活動の部員として、また大学の一つのシンボルとして果たす役割が大きいという事実を学生が理解し、自身が被害者にも加害者にもならないだけでなく家族や自身の所属する組織を守る上で重要な内容を理解してくれたものと考えている。

VI 総括

個人的には、2025年1月19日に交通事故に遭い（ほとんど被害者だが）、後期のまとめの時期であったことから、予定が大幅に狂ってしまった点は否めないが、年度当初に予定していたやるべきことはほぼ達成できたと考える。

次年度は、契約最終年であり、区切りの1年をしっかりと活動していきたいと考えている。

以上